

# スポーツイベントにおける包括的社会効果尺度の開発

押見 大地\*

## 抄録

わが国における近年のスポーツイベントのあり方は多様であり、スポーツイベントを通じた地域活性化は、開催都市の活性化や地方創生の起爆剤の一つとして期待されている。一方で、スポーツイベントの開催が、開催都市や地域に経済効果を与えることはよく指摘されるが、開催都市や開催地住民に与える社会効果についての解明は特に国内において充分ではなかった。そこで本研究は、スポーツイベントもたらす多様な社会効果を測定する包括的尺度を開発することを目的とした。尺度の開発は、4つの手順を踏まえて行われた。1つ目は、文献調査を通じた過去に指摘されてきた社会効果の整理・要約であり、2つ目は1都3県の住民を対象としたインターネット調査を通じた、自由記述方式による社会効果への期待・不安の収集。そして、3つ目が2名のスポーツマネジメントを専門とする専門家による尺度の内容妥当性の評価である。最後に、本調査として東京都民を対象としたインターネット調査による尺度の信頼性及び妥当性の評価を行った。検証の結果、11因子35項目の社会効果尺度において、一定の信頼性及び妥当性が確認された。本研究結果の貢献として、国内での試みが遅れていた包括的社会効果尺度を開発し、その妥当性および信頼性を検討した点が挙げられる。本研究で開発された社会効果尺度は、今後スポーツイベントが開催地域にもたらす多様な効果の検証に役立つことが期待される。

**キーワード：**スポーツイベント，社会効果，尺度開発，開催地域住民

---

\* オタワ大学 125 University Private (MNT 419A) Ottawa ON K1N 6N5 Canada

# Development of a Scale to Measure the Social Impact of Sporting Events

Daichi Oshimi \*

## Abstract

Interest in measuring the impact of sporting events has increased in Japan and is expected to be a tool in the revitalization of local city through the potential positive economic and social impacts such events can have on a host region. While many studies on the impact of sporting events have focused on their economic impact in order to assist politicians and event organizers in validating sporting event bids, there is a lack of research addressing the social impact of sporting events on host cities and host residents in Japan. Thus, the purpose of this study is to develop a comprehensive social impact scale for sporting events. The scale was developed in four steps. First, a literature review was carried out to summarize the social impact of sporting events. Second, a preliminary survey was conducted online to collect social impact items from residents of Tokyo and neighboring cities using free description. Third, the content validity of measurements was evaluated by two experts who specialize in sports event management. Finally, a main survey was conducted to check the validity and reliability of the scale. As a result, the validity and reliability of the scale (11 factors and 35 items) was confirmed with partial insufficiency to its criteria. The current study contributes to extending previous research by developing a social impact scale, an area barely explored in Japan. It could enable event organizers or local governments to evaluate the social impact of sporting events on a host region.

Key Words : sporting event, social impact, scale development, host residents

---

\* University of Ottawa, School of Human Kinetics, 125 University Private (MNT 419A), Ottawa, ON, K1N 6N5, Canada

## 1. はじめに

わが国における近年のスポーツイベントのあり方は多様であり、スポーツイベントを通じた地域活性化は、開催都市の経済活性化や地方創生の起爆剤の一つとして期待されている。一方、スポーツイベントの開催が、開催都市や地域に経済効果を与えることはよく指摘されるが、開催都市や開催地住民に与える社会効果についての説明は国内において充分ではなかった(山口ら, 2018)。近年、スポーツイベントがもたらす効果のうち、経済効果のみならず社会効果の重要性が指摘されてきていることから(Taks, 2013)、本研究が開発を目指す包括的社会効果尺度は学術的にも実務的にも意義を有しているといえる。本尺度の対象イベントの一つとして、2020年東京オリンピック・パラリンピックが挙げられるが、オリンピック・パラリンピックのみならず、他のスポーツイベントへの転用を意識した尺度構成を目指す。したがって、本尺度を他のイベントに援用することで、各スポーツイベントがもたらす効果の違いを認識し、それぞれの大会意義やあり方を確認することに繋がる。特に、我が国においては体系的な社会効果尺度の開発が行われてこなかったことから、本尺度はスポーツイベントにおける社会効果尺度のベンチマークになることが期待される。

## 2. 目的

本研究の目的は、スポーツイベントに着目し、スポーツイベントもたらす多様な社会効果を測定する包括的社会効果尺度を開発することである。

## 3. 方法

本研究は、1年間という研究期間を考慮し、尺度の基本構造の構築を研究ゴールとして設定した。研究の手順は、以下の4つのステップによって行われた(表1)。1つ目は、文献調査であり、過去に行われたスポーツイベントがもたらす社会効果に関する先行研究を整理し、社会効果の精選を行った。なお、スポーツイベントの社会効果尺度は海外で開発されたものが大半

を占めているため、海外の先行研究を中心として社会効果の整理を行った。2つ目のステップとして、2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催地域住民を対象として、イベントの開催地域住民が2020年東京オリンピック・パラリンピックに期待する効果および不安な点を収集した。この調査を行ったのは、文化や環境の特異性を考慮した尺度構成にすることが狙いである。サンプルは、性別・年齢・居住地等を考慮した割付(n=522)によるサンプリングを行い、自由記述方式によって記述してもらった。3つ目のステップとして、スポーツイベントを専門とする2名の専門家による内容的妥当性の確認を行った。本ステップでは、スポーツマネジメントを専門とする研究者のうち、イベントマネジメントやスポーツイベントのインパクト研究に精通した研究者2名を対象とした。研究の目的やそれぞれの因子及び項目の説明を行った後、それぞれの因子と各項目の対応を確認してもらい、必要に応じて両者間での合意のもと項目の追加や削除を行った。これら3つのステップは定性的に行われ、基本的な尺度構成を行った後に、ステップ4の定量的調査へと移った。

4つ目のステップにおける定量的調査では、作成した尺度の信頼性および妥当性をインターネット調査(n=1030)によって確認することが目的であった。2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催地域住民を対象としてインターネット調査を行い、ステップ1から3で作成された質問項目を、1から7段階評価のリッカート尺度「まったくそう思わない〜とてもそう思う」によって評価してもらった。その後、統計的手法を用いて尺度の信頼性及び妥当性の検証を行った。それぞれの検証では、確認的因子分析、Average Variance Extracted(平均分散抽出)、Composite Reliability(構成概念信頼性)らの算出によって、尺度の収束的妥当性および弁別的妥当性の検証を行った。

## 4. 結果及び考察

### 4.1. 定性的調査の結果

ステップ1から3にかけて収集された因子・項目は

表1. 研究の流れ

	定性的調査			定量的調査
	社会効果に関する項目の収集			尺度の信頼性/妥当性の検証
	ステップ1	ステップ2	ステップ3	ステップ4
調査	①文献調査	②インターネット住民調査	③専門家チェック	インターネット住民調査
対象	海外文献中心	イベント開催地住民	スポーツマネジメントの専門家2名	イベント開催地住民

表 2. 各項目の記述統計

	平均	SD	$\beta$	CR	AVE
<b>経済活動の促進</b>				.77	.53
大会のおかげで、東京都の経済状況が改善される	3.88	1.50	.67		
大会のおかげで、東京都の観光産業振興が促進される	4.64	1.56	.82		
大会のおかげで、東京都のインフラ整備が促進される	4.52	1.48	.69		
<b>イメージ・認知度の向上</b>				.86	.67
大会のおかげで、国際的に東京都のイメージが向上する	4.38	1.56	.80		
大会のおかげで、国際的に東京都の認知度が向上する	4.72	1.59	.84		
大会のおかげで、東京都を世界に知らせる機会が増加する	4.85	1.53	.81		
<b>多様性への理解・新たな機会の獲得</b>				.84	.58
大会のおかげで、人々の外国文化への興味が増す	4.30	1.48	.76		
大会のおかげで、人々はいつもと違う経験ができる	4.88	1.53	.76		
大会のおかげで、人々は多種多様な人々に対する理解を深められる	4.36	1.46	.77		
大会のおかげで、人々は新たなことを学ぶ機会が増える	4.44	1.49	.74		
<b>地域での一体感向上</b>				.88	.64
大会のおかげで、人々の友人や恋人などの人間関係が強まる	3.40	1.47	.78		
大会のおかげで、人々は地元地域で新しい友人や恋人などとの人間関係が作れる	3.52	1.45	.80		
大会のおかげで、人々は他者と強いつながりを感じる	3.76	1.49	.82		
大会のおかげで、人々は地元地域に対する所属(帰属)意識が強まる	3.69	1.46	.80		
<b>快感情の獲得</b>				.86	.68
人々は、東京都がオリンピック・パラリンピックのような大会を主催することを誇りに思う	4.17	1.67	.83		
人々は、東京都がオリンピック・パラリンピックを開催することに幸せを感じる	3.97	1.55	.83		
大会のおかげで、人々の気分が高揚する	4.69	1.61	.81		
<b>社会資本の構築促進</b>				.88	.65
大会のおかげで、人々は地元地域により関わろうという気になる	3.77	1.48	.81		
大会のおかげで、人々の地元地域に対する信頼が強まる	3.74	1.45	.83		
大会のおかげで、人々は地元地域のイベントにより頻繁に参加したいと思うようになる	3.71	1.41	.80		
大会のおかげで、人々の地元地域での交流が増える	3.83	1.48	.79		
<b>地域での会話促進</b>				.72	.47
人々は、東京オリンピック・パラリンピック(組織委員会)について個人的な意見を述べる事が出来る	3.13	1.52	.64		
人々は、東京オリンピック・パラリンピック(組織委員会)について地元地域の人々と意見交換をする	3.34	1.46	.76		
人々は、東京オリンピック・パラリンピック(組織委員会)についての会話をする	3.11	1.56	.64		
<b>スポーツへの興味促進</b>				.85	.71
大会のおかげで、人々はスポーツや運動をもっと行おうという気になる	4.14	1.50	.77		
人々のスポーツや運動への興味が、大会によって強まる	4.37	1.57	.88		
人々のスポーツや運動への興味が、大会によって促進される	4.39	1.54	.87		
<b>開催経費の過負担</b>				.82	.69
東京都による今大会の開催は過剰投資である	4.60	1.61	.85		
東京都は、大会を開催するための施設建設に税金を無駄遣している	4.70	1.61	.81		
<b>混乱や混雑の増加</b>				.68	.42
大会のせいで、人々の安全で平穏な日常生活が邪魔される	4.21	1.60	.74		
人々は、大会による大混雑があるため、都心に行くことは避ける	4.26	1.51	.61		
人々は、大会のせいで交通渋滞を経験する	5.29	1.39	.59		
<b>不安感の増幅</b>				.82	.60
大会開催に伴うテロ攻撃の可能性は、人々を不安にさせる	4.87	1.39	.80		
人々は、大会開催によってテロリストが来るのではないかと心配になる	4.79	1.45	.79		
人々は、大会開催にともなう治安の悪化が心配になる	4.67	1.44	.73		

計 11 因子 35 項目であった (表 2)。大会の開催によって経済的な効果や認知度や都市イメージの向上、異文化への興味や新たな経験の獲得が期待される「経済効果の促進(Waite, 2003)」、「イメージ・認知度の向上(e.g. Kim & Petrick, 2005)」、および「多様性への理解・新たな経験の獲得 (e.g. Oshimi et al., 2016)」、大会の開催によって地域内での交友関係が促進されたり、地元の人々との会話が促進され、地元への関与が高まる「地

域での一体感向上 (e.g. Prayag et al., 2013)」、「社会資本の構築促進 (e.g. Gibson et al., 2014)」、「地域での会話促進 (Taks et al., 2017)」、そして、大会による「快感情の獲得 (e.g. Chen, 2011)」や「スポーツへの興味促進 (Taks et al., 2017)」が抽出された。大会がもたらすネガティブな効果として、「開催経費の過負担 (e.g. Kim & Petrick, 2005)」や「混乱や混雑の増加 (e.g. Balduch et al., 2011)」、そして特にメガ・イ

表3. 因子間相関係数の平方とAVE

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1. 経済活動の促進	.53a										
2. イメージ・認知度の向上	.62	.67b									
3. 多様性への理解・新たな機会の獲得	.50	.64	.58c								
4. 地域での一体感向上	.42	.44	.53	.64d							
5. 快感情の獲得	.56	.64	.62	.57	.68e						
6. 社会資本の構築促進	.44	.48	.56	.74	.61	.65f					
7. 地域での会話促進	.25	.24	.28	.45	.29	.41	.47g				
8. スポーツへの興味促進	.50	.56	.59	.50	.59	.56	.27	.71h			
9. 開催経費の過負担	.04	.02	.02	.05	.08	.06	.02	.03	.69i		
10. 混乱や混雑の増加	.04	.03	.03	.07	.10	.06	.05	.05	.34	.42j	
11. 不安感の増幅	.00	.00	.00	.01	.00	.01	.01	.00	.22	.39	.60k

† a. 経済活動のAVE, b. イメージ・認知度のAVE, c. 多様性・新たな機会のAVE, d. 一体感のAVE, e. 快感情のAVE, f. 社会資本のAVE, g. 会話促進のAVE, h. スポーツへの興味のAVE, i. 開催経費の過負担のAVE, j. 混乱や混雑, k. 不安感のAVE

メントで見られる「不安感の増幅 (Prayag et al., 2013)」が抽出された。「不安感の増幅」については、特にステップ2における自由記述方式によるインターネット調査で多く見られた回答であった(巻末表5参照)。ステップ3における専門家チェックでは、特にノン・メガスポーツイベントにも対応する尺度構成とするため、「社会資本の構築促進」や「地域での会話促進」といった要素が追加された。

#### 4. 2. 定量的調査の結果

ステップ4における尺度の信頼性及び妥当性の確認のため確認的因子分析を行った( $\chi^2(df)=2.22(505)$ ,  $p < .000$ , CFI=.949, TLI=.940, RMSEA=.049, SRMR=.053)。適合度指標については、 $\chi^2/df$  ( $2.00 \leq$  基準値  $\leq 3.00$ )、CFI (comparative fit index) (基準値  $\geq 0.90$ )、TLI (Tucker-Lewis index) (基準値  $\geq .90$ )、RMSEA (root-mean-square error of approximation) (基準値  $\leq .080$ )、そしてSRMR (standardized root mean square residual) (基準値  $\leq .80$ ) の適合度指標が基準値 (Hu & Bentler, 1999) を満たした。収束的妥当性を示す AVE は、概ね基準値とされる.50 (Fornell & Larcker, 1981) を上回ったものの、「地域での会話促進 (.47)」と「混乱や混雑の増加 (.42)」は基準値に達しなかった。信頼性を示す CR は.75-.89 と基準値とされる.60 (Bagozzi & Yi, 1988) をすべて上回った。表3は、各因子の弁別的妥当性を示したものであり、検証の方法として因子間相関の平方と AVE

の比較検討 (Fornell & Larcker, 1981) を採用した。結果、4 因子間 (経済活動の促進 — イメージ・認知度の向上, 経済活動の促進 — 快感情の獲得, 多様性への理解・新たな機会の獲得 — 快感情の獲得, 地域での一体感向上 — 社会資本の構築促進) において基準値よりも高い相関関係がみられたが、その他の弁別的妥当性は確認された。

#### 5. まとめ

本研究の目的は、スポーツイベントにおける社会効果に着目し、スポーツイベントもたらす多様な社会効果を測定する包括的尺度を開発することであった。社会効果は、その重要性が多く研究者によって指摘されてきたにも関わらず、我が国においては包括的な尺度がこれまで開発されてこなかった。したがって、本研究で開発された社会効果尺度は学術的にも実務的にも重要な貢献につながるだろう。本尺度を援用することで、スポーツイベントがもたらす多様な効果を測定することが可能となり、スポーツの新たな価値を定量化することに繋がるのが期待される。

一方で、本尺度の妥当性には一定の課題を残しており、今後さらなる尺度の検討が必要になる点には注意が必要である。また、本尺度はその包括性を優先して開発を行ったため、因子及び項目を多めに設定しており、スポーツイベントの規模や状況に応じて取捨選択して改良・使用する柔軟性が必要となる。さらに、本尺度の中には、「経済活動の促進」および「開催経費の

過負担」といった経済効果に関連する因子を含んでおり、社会効果尺度の中に本因子を含めるかどうかは、研究者の立場や必要とされている情報の種類によって検討されたい。本因子は、評価者の主観をもとに評価するものであり、一般的な経済効果研究とは異なる指標となるが、経済効果についての質問項目である点は念頭に置く必要があるだろう。

本研究は、特に、2020年東京オリンピック・パラリンピックでの効果測定を目指して尺度開発を行ったが、2020年の前後には、2019ラグビーワールドカップや関西ワールドマスターズゲームズ2021が開催されることから、本尺度を用いて社会効果を検証することが可能となる。また、近年わが国で盛んに開催されている市民マラソンを中心としたノン・メガスポーツイベントを対象にして、本尺度の適用可能性を探ることも今後の検討事項となる。ポスト2020に向け、スポーツが持続的に発展していくためには、スポーツイベントがもたらす効果を客観的に測定・評価し、政策提言に結び付けていくことが必要不可欠である。本尺度はそのエビデンスをもたらす有効なツールとしての役割を期待したい。

#### 【参考文献】

- Bagozzi, R. P., & Yi, Y. (1988). On the evaluation of structural equation models. *Journal of the Academy of Marketing Science*, 16(1): 74-94.
- Balduck, A. L., Maes, M., & Buelens, M. (2011). The social impact of the Tour de France: Comparisons of residents' pre- and post-event perceptions. *European Sport Management Quarterly*, 11: 91-113.
- Chen, S. C. (2011). Residents' perceptions of the impact of major annual tourism events in Macao: Cluster analysis. *Journal of Convention and Event Tourism*, 12: 106-128.
- Fornell, C., & Larcker, D. F. (1981). Evaluating structural models with unobservable variables and measurement error. *Journal of Marketing Research*, 18: 39-50
- Gibson, H., Walker, M., Thapa, B., Kaplanidou, K., Geldenhuys, S., & Coetzee, W. (2014). Psychic-income and social capital among host nation residents: A pre-post analysis of the 2010 FIFA World Cup in South Africa. *Tourism Management*, 44: 113-122.
- Hu, L.T., & Bentler, P.M. (1999). Cutoff criteria for fit indexes in covariance structure analysis: Conventional criteria versus new alternatives. *Structural Equation Modeling*, 6(1): 1-55.
- Kim, S. S., & Petrick, J. F. (2005). Residents' perceptions on impacts of the FIFA 2002 World Cup: The case of Seoul as a host city. *Tourism Management*, 26: 25-38.
- Oshimi, D., Harada, M., & Fukuhara, T. (2016). Residents' perceptions on the socio-economic impacts of an international sporting event: Applying panel data design and a moderate variable. *Journal of Convention & Event Tourism*, 9(4): 294-317.
- Prayag, G., Hosany, S., Nunkoo, R., & Alders, T. (2013). London resident's support for the 2012 Olympic Games: The mediating effect of overall attitude. *Tourism Management*, 36: 629-640.
- Taks, M. (2013). Social sustainability of non-mega sport events in a global world. *European Journal for Sport and Society*, 10: 121-141.
- Taks, M & Rocha, C. (2017). Did Rio 2016 make the Brazilians happy?. In P. Hoover & K. Breedveld. The story of Rio 2016 (pp. 119-127). Utrecht (NL): Mulier Instituut.
- Waitt, G. (2003). Social impacts of the Sydney Olympics. *Annual of Tourism Research*, 30(1): 194-215.
- 山口志郎・押見大地・福原崇之 (2018) スポーツイベントが開催地域にもたらす効果：先行研究の検討。体育学研究，印刷中。

## 【参考資料】

表4. サンプルの属性 (参考資料)

性別		未既婚	
	%		%
男性	50.9	未婚	48.0
女性	49.1	既婚	52.0
	100.0 (%)		100.0 (%)
年代		職業	
19歳以下	6.1	会社員	48.1
20-29	16.7	主婦/主夫	14.8
30-39	21.1	学生	10.5
40-49	22.9	パート	11.1
50-59	16.7	公務員	2.5
60歳以上	16.5	自営業	4.1
	100.0 (%)	会社役員	1.7
平均	42.4 (14.41)	その他	7.2
			100.0
個人年収			
200万円以下	36.0		
200 - 399万円	22.5		
400 - 599万円	14.6		
600 - 799万円	8.6		
800 - 999万円	6.1		
1000万円以上	11.6		
	100.0		
居住年数			
	16.9 (15.7)		
		参加したい	参加したくない
東京2020でのボランティア参加意思		40.8	59.2
		100.0 (%)	

表5. 東京オリパラに期待する・心配する点 (n = 522) (参考資料)

期待する点		心配する点	
経済効果	323	外国人が来ることによる混乱	280
外国人旅行者数の増加	80	テロ攻撃	263
インフラ整備の促進	73	増税	86
多様な人々との出会い、理解促進	35	ホテルやレストラン等値段の高騰	77
興奮や感動	30	ごみの散乱	41
東京のイメージの向上	21	過剰投資	60
スポーツ振興	26	交通渋滞	30
パラリンピックの振興	5		

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。